

プログラム

※終演後、ホームページでも掲載致します。

1. ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ 第4番 イ短調 Op.23

作曲年：1800年～1801年頃

全3楽章（第1楽章：Presto 第2楽章：Andante scherzoso, più allegretto 第3楽章：Allegro molto）

ベートーヴェンが作曲したヴァイオリン・ソナタの中で初めての短調作品。

もともとは第5番と一組の作品として共に Op.23 と作品番号が振られていたが、後に出版社の手違いによって別々の作品番号が振り分けられた。ベートーヴェンはしばしば隣り合う番号に対照的な曲調を持つ作品を置くことで知られているが、この2曲も全くその通りの構成をしており、明暗感じさせる響きのコントラストが楽しめる作品である。

2. ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ 第10番 ト長調 Op.96

作曲年：1812年頃

全4楽章（第1楽章：Allegro moderato 第2楽章：Adagio espressivo 第3楽章：Scherzo: Allegro 第4楽章：Poco allegro）

ベートーヴェンが最後に作曲したヴァイオリン・ソナタであるこの作品は、前作の第9番から約10年後に作曲されたもので、前作の難解さとは対照的に柔和な響きを持つ曲。

高名なヴァイオリニストがウィーンに来た折に、ヴァイオリニストのコンサート用に作曲されたもので、自身の発想を表現したものというよりは奏者その人のことを考えながら作曲していたのではと考えられている。

献呈されたのは、ベートーヴェンのパトロンであり作曲の弟子であるルドルフ大公だが、大公のピアノとヴァイオリニストの演奏で初演を迎えた。

穏やかで田園的なこの曲は評判も大変よく、再演や楽譜の出版がされたが、自筆譜が完全には伝わっていないため、残念ながら初演時の作品の全容を再構築することはできない。

—— 休憩 20分 ——

3. ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ 第9番 ト長調 Op.47 「クロイツェル」

作曲年：1802年～1803年頃

全3楽章（第1楽章：Adagio sostenuto-Presto 第2楽章：Andante con variazioni 第3楽章：Finale: Presto）

その生涯で書いた10曲のヴァイオリン・ソナタの中でも最高傑作であり、ヴァイオリン音楽の中で古今最高の名曲と言われている作品。

当時ヴァイオリン・ソナタと呼ばれている作品たちは“ヴァイオリン助奏付きのピアノ・ソナタ”で、ピアノが主な作品であったが、本作品は“ほとんど協奏曲のように、極めて協奏風に書かれた、ヴァイオリン助奏付きのピアノ・ソナタ”とベートーヴェン自ら記した通り、ヴァイオリンもピアノも対等の関係で生き生きと演奏されるのが特徴である。

イギリスより名ヴァイオリニストがウィーンにやってくるということで作曲されたものの、当人に贈られることはなく、当時盛名のあったヴァイオリニスト、ロドルフ・クロイツェルに献呈。そのことからこの曲は『クロイツェル』の名がついているが、当のクロイツェルは一度も演奏しなかったと言われている。

アンコール曲

ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ 第10番ト長調 Op.96
第2楽章より

2022年3月26日（土）

神奈川県立相模湖交流センター ラックスマン ホール

鈴木理恵子 & 若林顕 第3回ヴァイオリン・ソナタ全曲演奏会

